狂言好野菖大名（きやうげんずきやぼたいしやう）

昔、豊の下長門守殿の子息馬之介殿と聞えしは大名の惣子と雖の通りの大様なれども、一家中を憐み給ふ事、花魁か尼を可愛がるが如し。

「いかに浦右衛門、我も人も長壽でなければならぬ。下下はいかう身を労するもの故、施藥をしようと思ふがどうだらう。」

家老淺黄浦右衛門「これはよい思召しつき、下々を憐れませらるゝ御仁心の程目日本だ〳〵。」

されば馬之介殿家中へ施藥あるべき樣子を、家老浦右衛門申し渡しければ、お長屋の女房娘皆々有難き由申し上げる。馬之介殿も御機嫌よく我等施藥の事を聞いて家中の女房娘子供かく喜び申す事、藥の冥加に叶ふべければ、すぐに藥の名に呼びて女の悦ぶ文字を其儘女悦丸と名づくべし、御家老殿如何に〳〵と宣ふ。浦右衛門眉をひそめ、女悦丸の名然るべからざる由申上げれば、然らば命を延ぶれば、とて長命丸と名

づくべし、如何に〳〵と又宣ふ。浦右衛門又此名差合なりと申し上げしが大きに腹立ち給ふ。

「憚りながら女悦丸と申す名は差合、長命丸と申す名は不躾でござります。その故如何となれば、後をいつちやアまけだ。」

「長命丸女悦丸の名何故差合ぢや、仔細は何と〳〵」某がいひ出したる事を用ゐぬ奴、身が前へはかなはぬ。立て〳〵。」

浦右衛門が金言却つて耳にさかひ、閉門仰せつけられければ、御家の忠臣殘らず御前へ出、色々詫言を申上げる。

「殿には大通の相が見えますれども、餘り野暮にて渡らせ給ふ。ちと通にお成り遊ばされませう、然し初めから廓通ひは御無用、まづ芝居から通にお成りなされませ。」

「成程、ちと芝居でも見物致さうよ。」

浦右衛門如き直臣を側を遠ざけらるゝ段、甚だよろしからざると申して唐の猿でございます。きやつとお叱りで堪忍なさるの事だ。まつた女悦丸長命丸の名は御前では申上げ憎い事もそれでざるから、ノソレよしかソレと申上げしかば、殿にも御心解けて浦右衛門が閉門を許し給ふ。

床壓數馬
本田大藏
折目角兵衛

全體素直な馬之介殿、家老中の諫めを聞入れ急に棲敷を仰せつけられ老臣引連れ見物ある。

「爰元の座頭は頼朝公か、祐經も團十郎、景清も團十郎ぢやな。さすれば景清と祐經を兼帶して居やるのか。」

「只今首を抜かれましたは稲荷町と申しまして役者の下々でござります。」

「門之介は日頃は短

氣ではございませぬが、時致の役者故氣を短う致しますのでございます。」

萩大名や鞦韆より外面白いと思うた事なき馬之介殿、芝居の面白味に心をうつし、芝居は通なるものと心得、諸事歌舞伎肌にし給ふ。

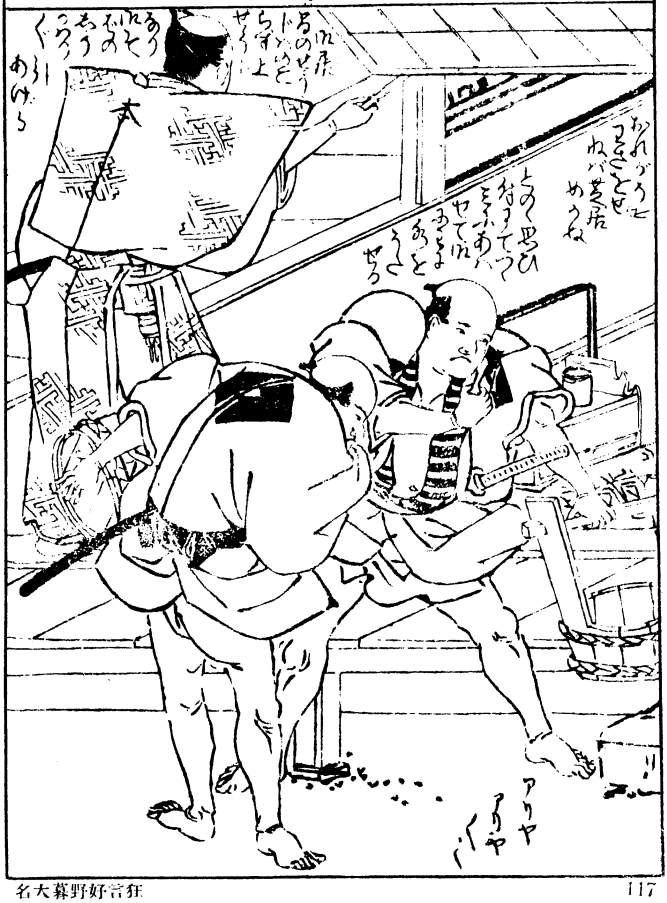
殿の思ひ附にて鼓こ合せてお庭に水を打たせる。

「ヨイヤサア。」

アリヤアリヤ〳〵。

「皆申しつけた通り水は打つが後でおれが喰をせねば芝居めかぬ。」

御居間の障子は殘らず上げ障子なり。お側の衆かはりぐ〳〵引上げる。



馬之介殿は何卒芝居で落をとらんと明暮心掛け給ふ。或日御鏡の日迄出て見給ふに、小間物屋と女中の話を立聞き、こゝぞ芝居の景物なりと、

国ツ紅葉の弾はまだ出来ねえかえ。

ハイ近日出来上ります。

此小間物なら年久しきお出入にてなかゝ面かましき事に

ハイ
ぢ日
ぢ
ぢ
ぢ

あらねば、さやうなる者にてはござりませぬといふを、殿には芝居の思召しゆゑ、そしておのれは何者だと宣ふ。小間物屋は正直一遍なれば、たゞお出入の小間物賣なりと申上げる。小間物賣なら小間物の謂因縁故事來歴を語れ、聞かん、と宣ふ。

「小間物の始めは存じませぬが、只それ〳〵の下細工で致させます。元値を聞かれては微塵だ。」

「サアそれはといへ。」

「怪しからねえ。」

淺黄浦右衛門、本田大藏、床かけ數馬等より〳〵評議しけるは、殿樣この間はたゞ芝居の事さへいへば通とお心得なされ、何事によらず芝居でこじつけ給ふ。ちと芝居の事はぐい流しに遊ばされ、北國通ひありたき事と忠臣の面々晝夜心に思ふ。

「あの様に芝居てばかりなさせられては、きつい野暮大名だ。能狂言の名とは聞えまい。」

「然し吉原へお通ひなさるゝ事は悪からう。いつそお屋敷へ遊君共を召し呼ばるゝ事だ。」

「女郎屋はいづれがよろしからう。丁字屋か、扇屋か、松葉屋だらう。」

浦右衛門が計らひにて松葉屋の遊女を御屋敷へ呼ばせらるゝ

「扨々、忌々しく重い籠だ、舌切雀ぢやアねえが、チョチョチョチョ」

「花魁江戸へいつたら跳る御馬を見んせう。」

「瀬山さんはもう來なんしたか。」

「さアき行きなんした。」

女郎屋を一軒遣手秀まで惣仕舞にて御屋敷へ呼んだ所、例の堅蔵の殿様、此頃少し芝居の氣取を覺えし故、芝居でさへすれば通ぜぬ事とおもひ女郎と家中をまぜこぜの芝居をせよと宣ふ。

「その方は白拍子どもか、白拍子のは

じまりは鳥羽院の御時、鳥の千歳、若の前がはじまりぢや。この流を掬んで狂言が上手だらう。」

「ヲヤ。」

「ムヽ。」

「ドウセウ。」

「手に汗を握つて居る、さぞ堅まつたらう。」

殿様のお好み故、家老の面々女郎共へ芝居の事を頼む。

「わつちらは遂に芝居を見んした事はおぜんせん。馬鹿らしい。」

「実に居られやす松庵老さへ芝居を致さるゝやうにとの事でござります。」

「やつがれは吉法家故下り役者と悪落

が來ねばいゝが。」
「どうも君達が芝居をなさつて下されねば、拙者共痛い腹を切りませねばなり申さぬ。自腹を切るより餘ッ程痛事々々。」
「ぬし達が腹を切りなんしちやアお氣の毒でありんす。苦勞しなんすな。どうともしんせう。」

お次の間を樂屋にしつらひ、皆々衣裳をつけるところ。

「おれを祐成とはきつい見立違ひだ。忠臣藏なら了竹か加古川本道だ。」

「しやんとして居たり。小い子が月代を剃るやうで衣裳がつけ憎い。」

「この白粉へは膠を入れぬせいか、根つからつかぬ。顔へ礬水を引けばよかつた。」

「このやうなものを着ていつそ氣恥しい。どうしんせう。いつそいどき憎うおつす。」

「出語りは揃ひの社杯、淺黄小袖はえのあるがいゝのお前の役は時致か。但し曾我の女郎素見なりか。」

「いつそ重たうありんす。」

東西々々。高うはござりんすが御免の家りいして一寸申しんす。この所はね、第一番目三立目でおぜんす。役人替名の様子を聞きなんし。いきくけすか大盡禿縁、道手衆お衆どん

同若葉、仲の町松屋のおかさん床がけ數馬、女郎衆わけ卷本田大藏、アノ子千鳥淺黄浦右衛門、同ねさめ折目角兵衛、堀の兄さん喜七なんと松庵、向うの人上總屋七兵衛鼻下馬之介

此役人替名はこの女郎の出放題故、あとの狂言には引合ひ申さず候。

此所第一番目二立目
世界は何だか分らず
只大でけ！〜。

「怪しい奴と見える
から大門口につけ
て居た。サア尋常

に酸漿を渡せ。拜みんす。」

「おろかや、松井の源五貞景が奪ひとつたる此酸漿、めつたに渡してつまるものか、まだ嘴の青酸漿の辛い目に合はねえうち、とつとゝ十ざしなくなれ。エ、。」

八幡の三郎に床がけ
數馬
工藤左衛門祐經に座
元馬之介、
「兄弟の子供に對面
の印は赤木の短刀
を四五十本取らせ
い。朝比奈呼び出
しやれ、大儀々々。」
近江の小藤太本田大
藏、
「兄弟が持つて來た
は屠蘇袋と袖の梅、
そんな醉を覺ます
ものは入らねえ。
早く持つて下れ

〳〵。」

小林の朝比奈に淺黄浦右衞門。

「コリヤ兄弟、これにおいでなさるお方が大分その方共をお笑ひなさる。屠蘇散と袖の梅の來由をおくぜりあられい〳〵。」

梶原源太に希若葉。

「曾我兄弟なら此やうな座敷へ出つけぬ故いつそ震へんす。早く引込まねえと遣手衆につからせるにえ引。」

對面のつらね
言葉の綾知述

十「丸散人のまず、たゞ薬研の音をきくと四方の赤良が通詩選、醫者のいの字は命のいの字、風に騒ぐは藪醫者殿と福内鬼外が淨瑠璃の。

五郎「文句紋日の約束も、ま違ひ紺甲鼻の下馬之介つね大名客

十「きやくや痞に奇妙とは、これ朝鮮の弘慶子、先に立たずと氣を長う

五「待つ年明けも十八年、數ゆる月日突出しの顔赤澤屋松屋まで新造三人迎ひにやり。

十「待つとはいざや紫金錠」酒の酔覺ふみ返す駒の足なみ駒下駄の

五「外八文字を一文字に飛びかゝりんして惡性な男の髪切指切の意氣地は外にアアつがもおぜんせん

十「お仓盛なる女郎を荒事株の役割は、これぞ一粒金靈丹、仕打は黒上黒丸子、

五「二人一座の初對面、十「袖の梅酒、五「屠蘇白散、十「謂「因縁「古事「來歷「あらゝかくの「通りでなしと「ホ、二人敬つて申す。

茶ア〳〵〳〵〳〵。

饅頭や茶菓子、有平や羊羹。